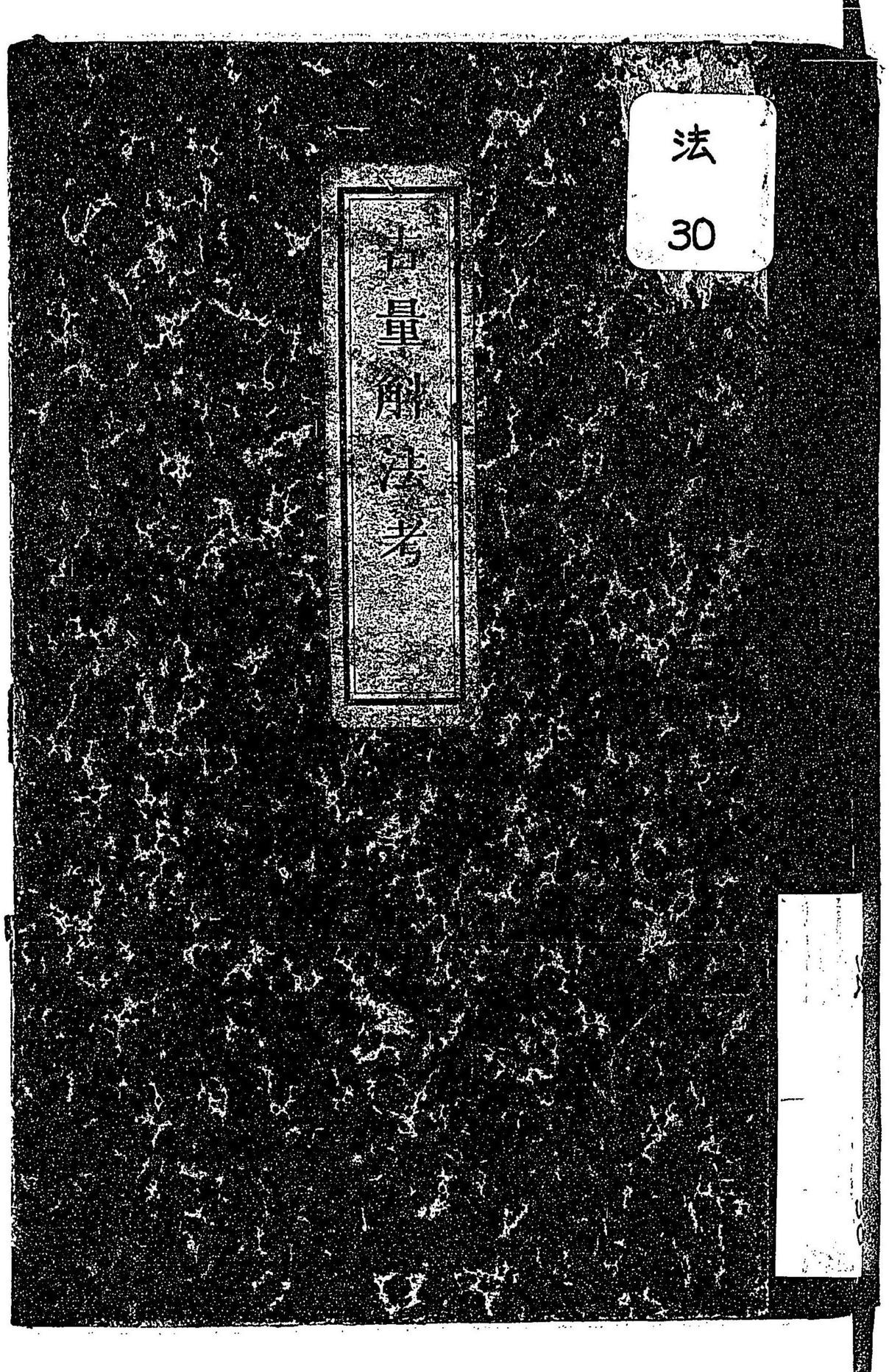


301014－000－6

法－30

古量斛法考

關千／著

M25. 5

BBA－0003

法
30

古量斛法考

古量斛法考序

世の中に人の知らえぬ事を。よく明らめて之をさとし。人のわきかてにする事を。よく辨へて之を知らしむるそ。聞ひの道の要にはありける。寛さきに日本史の食貨志を校訂する時。量制の知られさるをうれたく思ひて。かにかくに考へ物しつゝと。かの延暦の交替式に。檢税使の三千七百寸と云は。いかなるものゝ。ふや知り難きに困しみき。然るにゆくりなく西洲賀藩主前田家の古書中に。潤背と題せる書あり。その書中に寛治の御世の量制を委しく記せるを見出たり。かれ考證の助にもなりぬらんと。はしり書に寫しとり。家にもて歸り。かの三千七百寸の量制と。合せ見るに。そを知るへきたつきを得さりける。折しも敎子なる關千訪來ふけれは。その書

をみせて。又かの古量を寛治の制に求むへき術なきやと。いひしに。關千は天性まめやかにして。いと沉實(シツカ)に。物を詳に考ふる才あり。また算術をさへよく知れゝゝ。諸書に考へ見むとて。わかれにたり。程もなく一册を作りて。やゝ量制を知れり。されど交替式の制をは。いまた得考へすといへりき。其後二年はかりありて。再ひ思ひ起して。色川三中の度量考なとに合せ。くさ〳〵に思ひを深めつゝ。寛治の制によりて。古量をもわきまへられ。また後三條天皇の御世なる宣旨升も。明らかになれるにつけて。三千七百寸の數も知られたりとて。さきの考を修補して。古量解法考と名つけたる一卷を示せり。その考證いと委しく。さきに知られさりつる延曆の斗斛法も。明らかになりぬるは。れむかしきわさになんありける。

かれ其考說を世に廣め。考古家の是正をも請はむと。はかりしに。關千ふと風の心ちすと。云りけるかもとにて。やゝ〳〵に病重りて。二十七年を一期として。世を果敢なく過にしは。いともあはれに。いともくやしき限なりけり。あはれこの人命ながらへて。世にあらましか。人のしらえぬ事を。よく明らめしめ。人のわきかてにする事を。よくわきまへしめて。いと〳〵うれしきふしも。多かりつらんを。さる人の早くみうせぬるは。いかなるにかと。あたらしく思ひ居りつるに。その父正德ぬしその子の友かきなる清水の正健にあとらへて。斛法考を校正し。印刷に附て。同好にわかたむとす。其書既になれり。一言ものし給へといへは。この書のなれる故よしを記して。はしかきをしつる翁は。栗里主人栗田の寛にて。その

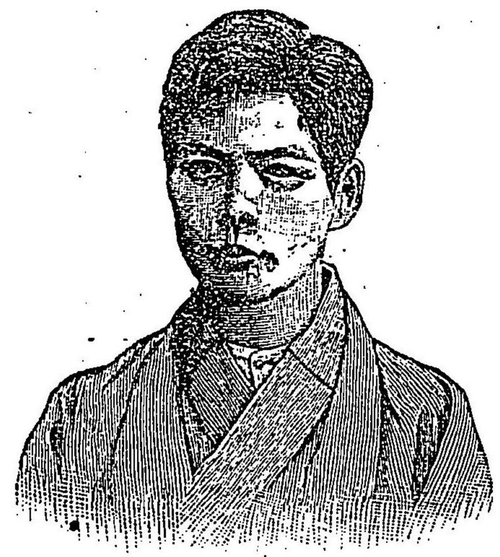
時は明治二十五年といふ年の四月五日はかりのほとふな
んありける。

孝哉關子　學業自强　卓然有立　下筆成章
貢蘇之例　古之斛量　啓蒙益世　孰不贊襄
曾務水産　會計是當　輿病歸省　命胡不臧
訓弟申孝　遺言永昌　垂名後世　雙親顯揚

明治二十五年四月

織田完之題

孝子關千肖像



元治元年甲子十一月八日生于水戸上市

明治二十四年辛卯五月十一日沒年廿七

古量斛法考

水戸　關千　著

本邦斗升ノ法ヲ考フルニ、舒明天皇ノ時始メテ其制立チ（扶桑略記代要記）皇極天皇ノ時三年升始テ定ル、（新撰和漢合運）文武天皇大寶二年、始頒度量於天下、元明天皇和銅六年、頒二下度量權衡於天下諸國（續日本紀）等ノ事、史書ニ見エ、令式並存スト雖、其斛法ヲ明カニセズ是ニ於テ斗石ノ大小幾許ナリシヤ詳カナラス、但故事要略口遊拾芥鈔等ニ據テ、大升減大升大小斤ノ法ヲ測知スルノミ、延曆交替式世ニ出テ、新定內外官交替式見ル、ミ及ブベキ斛法明カニ知ラルト云フ、近者又一古記ヲ得タリ、其書潤背ト題ス、舊加賀藩主前田家ノ所藏ニレテ、我師栗田先生嘗テ同家ノ古書ヲ閲覽スルノ次、之ヲ抄スト云フ、余受

テ之ヲ觀ル、其書中斗升ノ制ヲ記スヿ頗ル詳ナリ、時ニ先生云、コノ書載スル所ト交替式ノ寸法ト比較算當シテ相合スルヿヲ得バ、大ニ古量ノ考證トナラント、余亦於是種々思想ヲ費シ、然シテ後終ニ交替式三千二百寸ト合スルヿヲ發明セリ、

延曆交替式云、

天平六年七道撿稅使算計法、

東海道、以二千七百寸一爲二斛法一、

東山道、以二千八百寸一爲二斛法一、

北陸道、以二千八百寸一爲二斛法一、

山陰道、以三千二百寸一爲二斛法一、

山陽道、以二千七百寸一爲二斛法一、

西海道、以三千二百寸一爲二斛法一、

南海道、以二千八百寸一爲二斛法一、

寶龜七年畿內幷七道撿稅使算計法、

委穀、經二十年已上一者、以二千七百寸一爲二斛法一、

糯幷新委、不レ經レ年者、以二千八百寸一爲二斛法一、

粟穀者、以二千九百寸一爲二斛法一、

今按二天平六年一、使、七道異レ率、寶龜七年一、使、共是一例、主稅寮亦同二此法一、然則前使所レ算、更不レ可レ改、猶依二先計一、可レ待二物盡一、但天下一法、不レ可二參差一、自レ今以後、所レ委粟穀、可レ依二寶龜七年一例一

新定內外官交替式云、

凡算計法委穀、經二十年以上一者、以二千七百寸一爲二斛法一、糯幷新委、不レ經レ年者、以二千八百寸一爲二斛法一、粟穀者、以二千九百寸一爲二斛法一、

但有底敗ノ稻倉者、除高五寸ニ爲委穀之積ニ（コレハ延暦交替式ニ、自今以後、可レ依ニ寶龜七年例ニトアリ、ナリ、）

按スルニ天平ニハ三千二百寸、二千八百寸、二千七百寸ノ三等アリ、寶龜ニ至リテ二千七百寸、（委穀經二十年以上ニ者）二千八百寸、（糯并新委不レ經レ年者）二千九百寸（粟穀）三等トス、此法ハ檢稅使ノ算計法ヲ示シタルモノナレドモ、主稅寮亦同ニ此法ニトアレバ、公ニハ之ニ據リシナルベシ、（色川三仲云、諸國ノ內ニハ、天平法殘リテ、各國異量ノ升モ所在ニ行レシヲナルベシト、或ハ然ラン、）

因ニ云、撿稅使ハ今ノ會計檢査官ノ如シ、古ハ賦租ノ入、國衙ノ用、官人ノ祿、皆現物ヲ以テ出納ス、又諸官省大學寮國衙等ニ置ケル公廨稻ハ、所謂基本財產ニシテ、年々利殖シ、其利ヲ以テ雜用ニ充ツルモノナリ、夫等モ皆現物ニシテ、

穀粟ヲ第一トス、穀粟ハ猶今時ノ貨幣ノ如ク然リ、是撿査ノ法アル所以ニシテ、時々其官ヲ派出セシメ、諸國ニ貯積スル所ノ官物ヲ撿スルナリ、東大寺正倉院文書ノ和泉監天平九年正稅帳ニ、合遺定稻穀壹萬伍仟參佰玖拾貳斛伍升捌合捌勺壹撮、未撿、撿官物日量計所欠貳拾漆斛玖斗肆升、動用、云々ナドアル撿官物日量計ハ、蓋天平六年撿稅使撿量ノアリシトキヲ指スニヤ、是等ヲ以テ撿査ノ法實行セラレシヲ知ルベシ、然シテ其委物ヲ計ルニハ、一々量器ヲ用ヰルニアラズ、想フニ先ツ其貯フル物ノ積ヲ計リテ、粟穀ナレバ斛法ノ二千九百寸ニテ之ヲ除シテ、何百何十何石何斗アリト算スルノ法ナラン、斯クノ如ク甲倉ヨリ初メ、漸次乙丙丁倉ト有ラン限リヲ撿スルナルベシ、其

法粟穀ヲ積ミ置ケル處ノ丈尺、乃縱横幾何尺、高サ若干尺、其積若干ト算出シ、底ニ稻ヲ敷キタル倉ハ、其内ヨリ高サ五寸ヲケノ積ヲ減省シテ、其餘ヲ斛法ニテ除シ、何百何石ト知ル法ナルベシ、新定内外官交替式ニ、但有底敷稻倉者、除高五寸爲委穀之積トアルモ、之レガ爲メナルヲ考フベシ、是レ古ハ穀ヲ貯フルニ俵ニ入レ積ミ重ヌルニアラズシテ、今ノ板倉樣ノ内ニ、區域ヲ設ケテ、物ヲ容ルベキ樣ニナシ、其内ニ入レ置シナルベシ、其故ハ租ヲ收メ、出舉ノ利ヲ取ル、皆稻ノマヽ、束把ニシテ收受スレバ、勢ヒ委穀ハ俵トスルノ不利ナルヨリ、斯クスルモノナラン、今モ奥州邊ノ農家ニテハ、此クシテ穀類ヲ貯積セルヲ目擊セリ、又束把ニテ授受スルノ法モ、小作料ヲ取ルニ行ハレテ、甲ノ小作

ハ分作ト稱シ、收穫ノ際、地主其場ニ立合ヒテ、稻ヲ刈リ穫ル所ヲ折半シテ、地主小作人ト兩分シ、束稻ノマヽ、直ニ地主ニ納付スルヿ、陸中九戸郡等ニ其慣習ヲ存セリ、

右ニ揭クル斛法ニ就キ、今ノ量制ニ比シテ其異同ヲ示セバ左ノ如シ、

交替式斛法二千七百寸ハ	古ノ十合即一升ニシテ	今ノ八合ニ當ル	本供升ノ一升江州武佐升ノ一升ニ同シ	
仝 二千八百寸ハ	古ノ十合三勺七才有奇ニシテ	今ノ八合二勺九才有奇	○	
仝 二千九百寸ハ	古ノ十合七勺四才有奇ニシテ	今ノ八合五勺九才有奇	○	
仝 三千二百寸ハ	古ノ十一合八勺五才有奇ニシテ	今ノ九合六勺ナリ	寛文以前ノ京升俗ニ云昔升ノ一升ニ同シ	

二千七百寸、外三種ノ斛法ハ、古量各其一斛ノ積ナリ、第二段以下十合ヲ根基トシテ比較ヲトレルハ、便宜ノ爲メナリ、此ハ色川三中（常陸土浦人）ノ考證ナリ、今同氏ガ著書

度量衡考等ニヨリ、其説ノ大要ヲ輯錄シテ、之レガ解説ヲナシ、併テ鄙見ヲ加フ、

色川氏曰、皇國ノ古、瑞穗、國ト稱ス、穀粟ノ豊裕ナルヨリ冒セル名ナリ、故ニ度量衡ノ制、皆米ヨリ取レリ、度ハ其一粒ヲ一分トシ、曲尺ナリ、横米ニトル、縱米ハ鯨尺ノ一分ナリ、十粒ヲ一寸トシ、百粒ヲ一尺トス、古昔ノ田制ハ、一代ノ地ヨリ刈リ取ル所ノ稻一束ナリ、一束ハ十把ナリ、一把ヨリ粟一升ヲ出ス、コレヲ一升ト云フ、今量ノ八合也則本邦量ノ起原ニシテ、交替式二千七百寸ノ斛法是也、

千按、此説ノ根據ハ、令義解政事要略口遊拾芥抄等ナリ、度衡ハ暫ク措テ論セス、一把ヨリ粟一升ヲ出スハ、田令義解ニ一段地穫稻五十束、束稻舂テ得ル米五升也、◉口遊及拾芥抄

ニ、十分爲レ把、十把爲レ束、稻一束穀米五升舂トアリ、乃チ一把ヨリ出ツル穀一升、米ニ舂キテ五合ナリトス、◉一代ノ地ヨリ一束ヲ穫ルハ、政事要略ニ、令前租法、熟田五十代、租稻一束五把、以ニ大方六尺一爲レ歩、歩内得ニ米一升一、此大升也二百五十歩爲ニ五十代一、慶雲三年格ニ曰、准レ令以ニ大方五尺一爲レ歩、歩内得ニ米一升一、此稱ニ減大升一三百六十歩爲レ段者、云々トアル令前大升ノ法ナリ、(穫稻五十束ノ内租税一束五把ヲ出スハ、百分ノ三ニアタレリ、)

色川氏云、孝德天皇大化二年ニ、三百六十歩七百廿把ノ制、廿二把ノ租ノ事ヲ定メラレシモノナルニ、(千按七百廿把ヨリ租廿二把ヲ出スハ、百分ノ三箇〇五五不盡トナル、前ヨリ增スヿ〇五五不盡ナリ、)白雉三年ノ處ニ、一段ノ租十

五束トアリ、コレハ一段ヲ三百六十歩ニセラレシモ、土地ハ其マヽナレバ、割カタノ違ヒシノミニテ、サテモ有ヌベケレド、一段中ノ稲ヲ五百把ニ苅取ルヿハ、四ツカミ一把ノ稲トテ、今モ天下一般ニ百把一石ノ米ノ如クナレルホドノ苅法ニテ、神代ヨリ人ノ手ニ應ジタル苅カタナルベキニ、此御時ヨリ其法ヲカヘ玉ヒシハ、便利ナラヌカラニ、ホドナク又七年目ト云フニ、モトノ苅法ニナサレテ、其租モ十五束ニセラレシモノト見ユ云々、

千云、奥州ニ田幾刈ト云フヿアリ、岩代國郡山邊ヨリ仙臺以北ハ南部領ノ内マデ、田畠共ニ何刈ト云フ、北遊記ニ仙臺領ニテ田百刈ト云フハ、稲六把結ヲ一束トシテ、六百把ニテ百刈ナリ、百刈ハ一段歩ナリ、米六俵五斗入トルベシト

アリ、五斗入六俵ハ三石ナリ、六百把ニテ割レバ、一把ヨリ出ヅル米五合ナリ、サレバ籾ニテ一升ナリ、一段歩三石ハ、上田ト見ユタリ、但昔ハ縄延等アレバナルベシ●水戸近傍ノ農家ハ、四ツカミ一把ニスルト、五ツカミ六ツカミヲ一把トスルアリ、其四ツカミ一把ハ、株ノ青キ稲ヲ刈ルトキニ束ヌル法ナリト云フ、此ハ水田ノ地形ニヨルモノニシテ、水ノ乾カザル田ハ其株青ク、自ラ莖太キナリ、故ニ把トスルノ便ト、又此稲ハ多ク稻ヲ機ニ掛ケテ乾スユヱ、其取扱ノ輕便ヲ欲シテ斯クスルナリト、此一把ヨリハ籾八合ヲ出スベシ、乃チ色川氏ノ四ツカミ一把、古量一升ノ籾ヲ得ル束法ナルベシ、五ツカミ或ハ六ツカミヲ一把トスルハ、普通枯レタル稲ハ其莖細クナリテ、斯クスルモサノミ大把ニナラザレバナリト、此一把

ヨリハ籾一升餘ヲ出ス故ニ七把ヲ一束トシ、馬一駄ニ六束ヲ負セテ運ブ、此六束一駄ノ稻ヨリ籾一俵（五斗入）ヲ出スノ概算ヲ以テ定法トスルヨシ、但シ慣習ニテ小異アルベシ、

飛州志ニ稻束數考アリ、最委シケレハ、此ニ附テ參考ニ備フ、其考ニ云、上古ハ國々石計段別ナク、町數或ハ稻ノ束數ヲ以テ稱スル處、古記ニ見エタリ、然ルニ其束法ニ於テハ詳ナラサルカ、按スルニ此國（飛驒）ノ民ハ、今世モ專ラ束數ヲ稱スルモノ多シ、既ニ已カ所持スル田畠ノ高段別ヲバ分明ニ心得ズシテ、何百束ノ地、何十束刈ノ田ト云ヘバ、年毎ノ稻ノ豐凶ヲ語ルモ、五束刈ノ田ヨリ六束ヲ得、或ハ四束ニ及バズナンド、云フ、民ノ通語タリ、但上古ヲ辨ヘザレバ、

此國ノ法ト云ヘルモ是レニアタルベキヤ、其可否ヲ知ラズ、唯州内一般ノ習風タルカ故ニ、若古風ノ遺在セルモノカ、其大旨ヲ載ス、稻一把ハ農夫ノ鎌ヲ以テ刈揚ル其手ノ内ノ一握ナルモノ三ツヲ合セテ、一把ト稱セリ、是ヲ穭（タバネ）ルニハ、外ニ稻二株ヲ刈テ、稻穗ノ方ヲ結ビテ繩ノ代トナシ、穭ルナリ、尤此繩ノ代トセシ穗モ、同ク一把ノ籾ノ數ニ入レリ、民ノ通稱是ヲ三手内一把ト云ヘリ、此一手（ヒトテ）ト云ヒ一握ト云フハ、大指ト中指ニテ握ラル、マテヲ限トス、俗中指ヲ六寸指トモ云ヘバ、一手ハ凡六寸圍ホドニシテ、一把ノ圍凡一尺六寸五分ナルカ、刈揚ルニハ婦女モ是ヲツトメヌレバ、大中小人ト平均シテ、自ラ中人ニ當ルナルベシ、稻一束ハ前條ノ一把十數ヲ以テ一束ト稱セリ、故ニ稻ヲ始

メ草木ニ至ルマデモ、總テ一把ト稱ルトキハ、必此法ヲ用ル事ナリ、或曰、古昔稻六十束ノ地ヲ以テ一段歩ト定メ、六十束ニ及バザル地ヲ中下田トスト云フ、今世ノ民ハ此一手一握ノ掌中ニ、甚ダ異樣ヲ巧ミテ、年ヲ追テ古法廢レントセリ、是下民ノ私ニシテ、全ク一把ノ稻ヲ增シテ、其田ノ束數ヲ減シ、他ニ見スベキノ爲ナルベシ、又越中ノ人ノ語リケルハ、稻一把ハ三手ヲ用ユ、一束ハ其十二把ヲ以テ稱ルトナリ、濃州ノ民ハ、古法三手ヲ以テ一把トシ、十把ヲ以テ一束トスト云ヘ𪜈、今世ハ三手半或ハ四手ヲ用ヒ、敢テ法ニ拘ラスト云ヘリ、

○交替式二千七百寸ノ斛法、　古十合量ノ一斛、●今ノ八斗ニ當ル、

當御用升本供升ハ、古十合量ノ眞物ナルベク、江州武佐升（又ムサ）ハ其名殘ナルベシ、世ニ無判ノ八合判ト云フアルモ是ナリ、當御用升ト云ハ、禁中ニテ用ラル、モノ、本供升ハ伊勢供用升トテ、神宮ニ用ラル、所ト云フ、武佐升ハ太宰純ノ經濟錄ニ、江州ニハ佐々木氏ノ制トテ、八合ヲ一升トス、コレヲ武者升ト云、武者ハ地名ナリト云フモノ是ナリ、其地ニテ私ニ作レル升ノ稱世ニ弘マリシモノナルベシ、其升徑曲尺四寸六分五厘、深曲尺二寸三分九八、此積五十一寸八分六厘、本供升ヨリ少シク小ナリ、律原發揮ニ云フ、口方四寸六分半、深二寸三分八厘半强、容二京升八合一、無レ歇無レ餘云、

當御用升及本供升

徑曲尺四寸五分、㊀深曲尺二寸六分、㊁此積五十二寸六分五厘、㊂今量ノ八合一勺二才一ヲ容ル、按スルニ是古ノ十合量ノ眞物ナルベシ、交替式ノ斛法二千七百寸（是ハ一尺二寸五分ノ大尺ヲ以テ定メタルナリ）ノ一升ト同シ、交替式斛法大尺二千七百寸、依レ之バ一升ハ大尺二十七寸、是ヲ曲尺ニ直ストキハ、五十二寸七分三厘餘ナリ、交替式斛法ニ依ルニ、一升量ノ上ニテ本供升ノ積ヨリハ八厘餘多シ、此違ヒハ元ト交替式斛法二千七百寸ニヨリテ一升ノ量ヲ作ルニ、度ノ消息ニヨリ奇零ヲ捨テ、寸分而已ヲ用ユル故ニ減ズルモノナル事明ケシ、其法四寸五分ヲ相乘シテ、二〇二五トナル、是ヲ法トシテ、五十二寸七分三厘餘ヲ除スルニ、其量ノ深二寸六分〇四毫バカリヲ得、此四毫ハ目ニモ及ベカラズ、依レ之二寸

六分而已ヲ用テ、升ノ深ヲ作ル、是其減ズルノ故ナリ、二寸六分ヲ乘ジテ得ル所ノ積五十二寸六分五厘ト定マレトモ、其實ハ五十二寸七分三厘ナリ、然レトモ前ニ云ヘル如ク量ヲ製スルトキハ、度ニ隨フモノ故、奇零ハ微ニシテ工匠ノ力ニモ及ガタク、却テ違ヒ易キヲ以テ、之ヲ捨ツ、捨タルトテモ左ノミ大ナル違ハナケレバ、便ニ隨テ製シタルモノナルベシ、左ルヲ其根元ヲ極メザル内ハ、三器共ニ不平ニシテ適ハザルモノヽ樣ナレトモ、カク究ムル上ハ少モ疑ナシ、二千七百寸（丈尺）ヲ曲尺ノ積ニ直スニハ、二千七百寸ト置キ、小尺律一九五三一二五ヲ乘ズベシ、即チ五千二百七十三寸四三七五トナル、一升ノ積ハ之ヲ百分シテ五十二寸七分三厘四三七五ナリ、（以下倣之）

千按、交替式斛法ハ、大尺一尺二寸五分ヲ用ヰルヨシ註スレドモ、當時ノ小尺ヲ今ノ曲尺トスレバ、大尺ハ小尺ノ一尺二寸ナレバ、之ト合ハズ、一尺二寸五分尺ハ、後世ノ鯨尺ノ法ナリ、

大日本史食貨志云、元明帝和銅六年、改二定度量權衡一、頒二布其法於天下一、續日本紀蓋自レ此度量衡皆從二唐制一、而官私悉用レ大、云々ト、之ニヨレバ當時量器等ヲ製スル大尺ヲ用ヰシヤ疑ナシ、集古圖卷七ニ法隆寺所傳ノ常陸國信太郡中家郷戸主大伴部羊調布進納天平勝寶八年十月ト書銘アル布、片ノ圖ヲ載セタリ

按以二大尺一度レ之、俗ニ云吳服尺潤一尺九寸、以二小尺一曲尺度ルニ二尺三寸弱ト言ヒ、續日本紀、天平八年五月辛卯、諸國調布長二

丈八尺、潤一尺九寸、庸布長一丈四尺、潤一尺九寸ヲ爲レ端貢レ之、云云ノ文ヲ引テ、當時ノ大尺ハ後世ノ吳服尺ナルヲ證セリ、是ニ據レバ大尺ハ曲尺一尺二寸ニシテ、小尺ハ今ノ曲尺ナルヲ知ルベシ、又東大寺所レ傳天平尺アリ、其十寸ハ曲尺ノ九寸七分八厘ニ當レリ、說者云、是即唐ノ大尺ニシテ和銅ノ大尺ナリト、或ハ云フ、是レ小尺ナリ、而シテ後世ノ曲尺ハ其訛長セルモノナリト、二者相合ハスト雖、後說恐ラクハ是ナルニ似タリ、只大尺ヲ一尺二寸五分トスルハ、令文ノ趣ニ違ヘリ、然レ𪜈量制ノ法、今曲尺ノ法ト相乘除シテ違ハザルヲ見レバ、或ハ一尺二寸五分ナリシヤ知ルベカラズ、色川氏ノ說、周尺ヲ六寸二分五厘トシ、一尺二寸五分ノ尺ハ之ヲ倍用セシモ

ノトス、然レ𪜈著書中詳論之ニ及バザルヲ以テ、書レテ大方ニ質ス、

一九五三一二五ナル數ハ、乃チ大尺一寸ヲ曲尺一寸五厘ニ直シタルツモリニシテ、十二半ヲ自乘シタルモノヘ、又十二半ヲ乘ジタルモノナリ、

當御用升ハ、古ノ宣旨升ナレバ、九六ニハアラズ、正シク二千七百寸ノ升ナリ、聊カ足ザルハ升ヲ造ルノ寸法ヨリカクモナリ行ケリ、

千按、當御用升ハ古ノ宣旨升ナレハ云々、此說非ナルベシ、伊呂波字類抄ニ、延久宣旨云、方一尺六分、高三寸六分ト見ユ、何故之ヲ捨テ、、斯クハ云レシヅ、方壹尺六分、高三寸六分、四九六トナル、寛治ノ制斗三

百二十寸ヲ以テ除スレバ、一斗二升六合四勺〇五圭トナル、

又云、本邦上古ノ量一升ハ、今量ノ八合ナリト云フ考ハ、概シテ異說ナキガ如シ、好古小錄ニ民部省厨斗、十合升、山科升、近江升、東大寺常十合升、其名同ジカラザレドモ、受ル所ハ十合ノ八合升ニシテ、雜令ニ所謂十合ヲ升トスト云フ一升ノマス也、此三升ヲ大升ノ一升トス、三八二升四合ナリトミエ延喜式工事通解ニ、雜式ニ云、凡公私運レ米、五斗爲レ俵、仍用二三俵一爲レ駄、トアルモ、八合量ノ五斗ニシテ、今量ノ四斗ナリ、ソノ三俵ハ一石二斗即四十八貫ニテ、全ク今ノ駄法ニ同シトイヘリ、

〇交替式二千八百寸ノ斛法、古十合四勺量ノ一斛、今ノ

八斗二升九合有奇、

甲州ニハ三升マスヲ用、同國郡内領ニハ二升五合升ヲ用井ルナラハシナリ、經濟錄ニ、之ヲ武田氏ノ制トテ用井ルヨシ記セレド、疑ハシ、都留郡所用●二升五合徑七寸一分三厘、深三寸二分、一升マスト云ヒ、●四ッ割徑四寸四分、深二寸三分、一盃ト云ヒ、○八ッ割徑三寸三分、厘、深一寸八分、古ハセンジ升ト言ヒ、今ハ半ラ升ト云フ、

色川氏云、按此八ッ割ヲ宣旨升ト云ハアヤマリナルベシ、又本府ノ升四分一ヲ宣旨升ト云ト云ルモ、本國ノ傳ヘモトヨリ是ナリ、誤ニアラズ、是ハ此二升五合升ノ三分一ナルヲ宣旨升トハ言ニヅ有ケル、

甲州升

徑七寸五分、●深三寸五分、●此積百、九十六寸八七五、●今量京升ノ三升○三勺六九強ヲ容ル、此一升明治十九年五月東京駿河臺聖堂先生家塾テニ於テ、一見ヲ許サレタリキ、就テ計ルニ此如クナリ、

或人曰、三升マスモ其半分モ四分一モ、皆古量ノ殘レルハ大ブリナリト、色川氏云、モトノ大ブリナルハ、三升三合三勺ノ升ナルベシ、如何トナレバ、是交替式二千八百寸ノ升古ノ十○四ノ升ナリノ四升マスナルヿ疑ナシ、夫故ニ其四分一ヲセンジトハイヘルナルベシ、又郡内領ナル二升五合升ハ、二千八百寸ノ三升マスナリ、コレニテモ知ルベシ二千八百寸ヲ四ッ合セ一萬千二百寸ヲ三千三百三十寸今升ナリニワレバ、三升三合三三不盡ノ升トナルナリ、二升五合升ハ古量十合○四勺ノ出來ノ上ニテ、三升マストシテ、全ク合

フナリ、
香取神宮ノ三升三合升モ、三三ノ升ニシテ、コレヲ同社ニテ金丸升ト云フ、則甲州升ニ同ジ理リニテ、モトハ地子升ノ四升マスナルヿ疑ベキナシ、
千按此甲斐ノ宣旨升ハ、古量八合トスルノ説アリテ、此説ト異ナリ、甲斐ノ國常用量三升ノ四分一ノ量ヲ、俗ニセンジト云フ、常用量ノ七合五勺ヲ受ク、方四寸四分八厘、深二寸四分五厘アリ、十合量ノ三升一合六勺、コレヲ四分スレバ七合九勺ナリ、是八合量ノ一升ナルベシ云々、然レ𪜈實際ニ於テ五勺ヲ不足スレバ、強チ八合量トハ云ヒ難シ、

○交替式二千九百寸ノ斛法、

右説ナシ、蓋シ此量及二千八百寸法ノ升ノ如キハ、世ニ行ハレザリシガ爲メカ、古量器ノ今ニ存シテ之レニ近キモノナシト見エタリ、

○交替式三千二百寸ノ斛法、　古十二合量ノ一斛、●今ノ九斗六升、

寛文以前ニ行ハレシ京判、即俗ニ古升ト稱スルモノ是ナリ、元龜元年八月ノ刻字アル内侍所量是ニ同シ、潤背ニ載スル寛治宣旨升亦此法ニ同シ、寛治中量制ヲ定メラレシヿハ、諸書ニ見エズ、本書ニ依リテ初テ此事アルヲ知ル、寛治ニハ諸國ノ總撿トテ五畿七道ノ田數ヲ殘ラズ檢メラレシコト𡚁相記ニ見ユレバ、固ヨリ是等ノ事モ沙汰アリシヿ疑フベカラズ、然レ𪜈延久四年長保

ノ例ニヨリテ、宣旨斗ヲ定メラレ、未タ幾クナラズシテ其沙汰アリシハ、蓋シ三千二百寸ノ法民間久ク用井テ便トセシニヨルカ、又此升ノ寛文年中マテ行ハレシモ由アルベシ、然ラバ世ニ宣旨升ト云フヲ、後三條天皇延久ノ制ノミト心得ルモイカヾアラン、寛治ノ量モ後ニハ宣旨旨升ト云ヒシモ知ルベカラズ、東鑑建久四年三月ノ條ニ、●宣旨升定トアルナド、恐ラクハ此三千二百寸ノ升ナラントヅ思ハル、

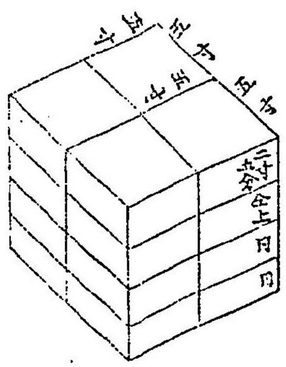
元龜内侍所量、寛文以前ニ行ハレシ古升、

●此積六十二寸五分、●今量ノ九合

徑五寸、●深貳寸五分、●

六勺ヲ容ル、難波家所藏古升裏書云、方面五寸、竪深二寸五分、立積六十二寸半、以養老大尺量、長保新製官升、寸法立積ト

全ク同シ、此升ハ慶長新製之京升以前、天下諸國通用、トアリ是亦元龜内侍所量ト全ク同シキハ奇ト謂ベシ、サテ三器考畧ニ、一尺立方ヲ十六ニ割タル圖アリ、即チ下ノ如シ、一尺立方ヲ十六ニ割リタル一ツハ、口方五寸、深二寸五分トナル、又一尺立方ハ寸ニ直シテ其積千寸ナリ、之ヲ十六ニ割レバ六十二寸五分トナル、



六十二寸半ノ今用ノ九六升ハ、

交替式斛法三千二百寸ノ一升

量ニ毫モ違ハザル物也、交替式斛法三千二百寸大尺一升ハ、三十二寸、曲尺ニ直スニ六十二寸半ナリ、徑五寸ヲ自乘シテ二五ヲ得、是ニテ六二半ヲ除スルニ、深サ二寸五分ヲ

得、是ヲ以テ升ヲ製スルニ、六十二寸半ヲ得テ奇零アルヿナシ、依テ交替式斛法ノマヽ、今ニ傳テ少モ違フヿナシ、

千按、寛文以前マデ行ハレシ古升六十二寸ノモノハ五ハ、寛治ノ制ノ行レタルナリ、寛治ノ制ハ交替式三千二百寸ノ斛法ニ基キテ、定メラレタルナリ、彼ノ潤背ヲ見レバ、其由テ來ル所ヲ推知スルヲ得ベシ、此書ハ世間ノ人未タ知ラザル所ナルヲ以テ、今其斗升ニ係ル一節ヲ左ニ揭テ江湖ニ傳ヘントス、其文云、斗升之量、隨レ代沿革不レ一、其原本、起三自黃鐘之管一云々、今就二斗升一言レ之、寛治年中、被三定二量器一云、合方二寸、深八分、積三十二分、積算術云、方二寸ハ得二二十分一爲レ長、廣サ又二十分、二十ナル者有二二十一一爲二四百一(方一分ナル者爲レ有二四百一)以二深サ八分一乘レ之云、乘レ之者四百ナル者有レ八、四八而爲三

千二百一、是當三三寸二分一也、如何セバ爲レ當、方一寸(十分也)爲二百分一、深又十分爲二一千分一、此有三三千分一、是爲二廣深各十分ナル者有レ三也、又方十分爲二百分一、深二分即二百分也、是爲二一合積一也、

然世俗多作升云云、寛治宣旨曰、升、方四寸、深二寸、積三十二寸云々、方四寸者長廣各一寸ナル者有レ四、四四而得二十六一、以二深二寸一累レ之、得二三十二寸一、謂方六面各一寸、其積有二千分一、故一升積三万二千分也、

斗、寛治宣旨云、斗方一尺、深三寸二分、積三百二十寸云々、方一尺、是長廣十寸也、呼二十十一百一得二百寸一、以二深三寸二分一呼之、得二三百二十寸一爲二斗積一、若以レ分言レ之、三十二万分爲二一斗積一也、

斛、寛治宣斛方二尺、深八寸、積三千二百寸爲二斛積一云々、謂

方二尺、二尺爲二百分、長廣二百、呼二二ガ四一得四万分、以深八寸(八十分也)呼四八卅二一、爲三千二百寸、若以分言之、三百二十万分一斛積也、

若欲知半斛斗者、口徑各一尺六寸、底方四寸、深一尺六寸、是爲五斗量也、問曰、半斛量如何知之、答曰半減、術曰口方一尺六寸、底方四寸、相并得二尺、半之得一尺、斛一尺爲十寸、十十相呼得百寸、以深一尺六寸十六也相呼得一千六百寸、爲半石積也、

次段合一合者米何粒哉云云、此條升合既以分寸定之、米粒依田地沃瘠、米粒難定、若好事人欲辨知者、作一合之量方二寸深八分、以其米以秤權之、得一合米定數、十分之一爲一勺數、百分之一爲一撮數、量一分數、以十十相累、以爲

升數斗數、爲斛數、爲半斛數、有何疑乎、以宣旨升事、寛治宣旨裁上斛了、

右ニヨリテ古量ノ制作知ルベシ、乃チ合方二寸深八分、積三寸二分、◉升方四寸深二寸、積三十二寸、◉斗方一尺深二分、積三百二十寸、◉斛方二尺深八寸、積三千二百寸ナリ、今夫レ一升ニ就テ之ヲ言フトキハ、方四寸ヘ十二半ヲ乘スレバ方五寸トナリ、深二寸ヘ十二半ヲ乘スレバ二寸五分トナル、乃チ前ニ出ス内侍所量寛文以前ノ古升ノ寸法ト等シ、此積六十二寸半ナリ、又一升ノ積三十二寸大尺ヘ一九五三一二五二十半ヲ再自乘セルモノヲ乘スレバ、積六十二寸半トナル、其理大尺ヲ小尺ニ直スノ法ナレバ、孰レニテモ同シキナリ、若シ色川氏ヲシテ之ヲ見セシメバ、案ヲ拍テ喜ヒ、其考說ヲ

確メ、又更ニ發明スル所アリシナルベシ、南禪寺末正傳寺衆僧ノ申狀ニ、正傳寺衆僧等謹言上ス、右子細者、雲門庵領就二蔵崗年貢升之不審一、先度證文出帶之間、令二披見一之處、升之寸方明鏡也、仍不レ及二異儀一、落居畢、然間彼升有二出來一者、年貢可二渡進一之由、領掌之處、于レ今不二渡賜一、而結句年貢難澁云云、言語道斷之次第也、所詮任二證文之旨一、竪二寸横四寸之升、有二出來一者、無二相違一年貢可二渡進一者也、仍粗謹言上如レ件、文明拾參年三月日トアル、竪二寸横四寸ノ積三十二寸ナルモ、此升ノ法ナルベシ、其寸法同シケレバナリ、今量俗ニ云京升(乃チ現時行ハル、所ノ升)徑四寸九分、深二寸七分、此積六十四寸八二七、此升ハ古升(既文前ニ行ハレシ)ノ五寸ヲ一分減シテ四寸九分トシ、二寸五

分ヘ一分ツヽ、二分增シ、二寸七分トシタルナリ、然レバ乘除ナキガ如クナレドモ、其間ニ三勺五才餘ノ餘積ヲ生ス、之レ今ノ十合量ニシテ、古量(二千七百寸)ノ十二合半ニ當ル升ナリ、本供升ノ積ヨリ推ストキハ、其積六十五寸八分一二五トナリ、今量ヨリ多キ一九百八十五分五ニシテ相當ラズ、然レ𪜈今試ニ此京升ノ積ヲ交替式ノ斛法ニ習テ推ストキハ、大尺三千三百三十寸程ノモノトナルナリ、故ニ一升ハ三十三寸三分ニ當ル、曲尺ニ直スニ六十五寸〇三九餘ナリ、今四寸九分ヲ自乘シテ得ル所ノ二四〇一ヲ法トシテ六十五寸〇三九ヲ除スルニ、深サ二寸七分〇八毫餘ヲ得、奇零ヲ去リ二寸七分ヲ以テ升ヲ製ス、則六十四寸八二七ヲ得、其違ヲ生ズルハ前ニ云ヘル如ク、奇零ハ工匠ノ

力及ビ難クシテ、却テ法ニ違ヒ易キノ恐アルヲ以テ、捨ツルガ爲メナリ、

周一乘ノ干粉二七七七七ノ九六ハ、二六六六六不盡ナリ、是ヲ法トシテ交替式二千七百寸ノ石法ヲ九六ニナセバ、又二六六六ナリ、小尺律一九五三一二五ヘ因スレバ、五十二寸〇八三二トナル、是ハ升法一五四三ヲカケテ、全八合零三六四三七七六トナル、◉此五十二寸〇八三二ヘ十二ヲ因スレバ、六十二寸半（今ノ九六判乃チ交替式三千二百寸ノ斛法ノ一升トナル、◉十二半ヲ因スレハ六十五寸一分〇四ト成ル、是誠ノ十二合五勺ナリ、試ニ此升ヲ造ラバ、四寸九分ヲ自乘シテ二四〇一トナル、是ヲ法トシテ六十五寸一分〇四ヲ除スレバ、二寸七分一厘一毛五三六二トナル、是深サナリ、奇零升ヲ造

ルニハ如何トモスベカラズ、是ヲステ、二寸七分トナス物ナルベシ、是ヨリシテ積ヲ得ル時ハ、六十四寸八分二七トナル、是ハ四寸九分二寸七分ト奇零ヲ捨テ升ヲ造ル故ニ、六四八二七ト成ルナリ、此譯ヲ心得ベシ、

一法五一七〇四、　一法五四三、　一法五三六、

一五四三ハ今ノ京升ノ一寸四方ノ入ナレドモ、是ハ其出來タル器ニ就テハカリシ入ナレバ、用井ルニ足ラス、二千七百寸ノ升ニヨレバ、今曲尺一寸ノ入一五一七〇四トスベシ、其一五三六ハ如何ニト云ニ、二千七百寸ヲ以テ十二半ヲ乘シテ作リタル升ハ、三千三百七十五寸ニナリテ、誠ノ十二合半升ニアラズ、是ハ三千三百三十寸ノ發リニテ、此三千三百三十寸ヲ九六ニスレバ、三千二百寸ニシテ、此

升即今ノ十二合升、曲尺ノ一升積六十二寸半ノ升ナリ、是ハ一五三六ノ入ナラヲバ合ハズ、一五三六ニテ六十二寸半ヘ、正シク九六ニナルナリ、三千三百三十寸ハ九六ニシテ三千二百寸ナリ、二千七百寸ハ九六ニハセズシテ二千七百七十七寸七七ナルヲ、奇零ヲ去リテ二千七百寸トシタルノミ、故是ハ同ナガラ少々異ナリ、二千七百七十七寸ヲ九六ニスレバ、二千六百六十六寸ニナリテ、其意タガフナリ、此文誤易シ、三千二百寸ト三千三百寸ヲ基トシテ、一五一七〇四ヲ本ノ古升ノ定トスベシ、

古量斛法考

後序

嗚呼。孝子闕千ノ遺著古量斛法考ハ。其考證ノ明確ナル。既ニ識者ノ賛嘆スル所タリ。予爰ニ其履歴ヲ述ント欲スレバ。涕涙ノ把ニ盈ツルヲ覺ヘサルナリ。回顧スレバ。明治十八年關千始テ予家ニ來寓シ。大日本水産會ニ聘セラレ。主トシテ報告書ヲ編輯シ。兼テ會計事務ヲ管ス。其勉強力ト其品行ノ方正ナルコト。人咸之ヲ稱ス。嘗テ貢蘇考一書ヲ著シ。之ヲ大日本農會報告書ニ載ス。常ニ意ヲ實用ニ注キ。專ラ力ヲ水産ニ竭ス。終始一日ノ如シ。而シテ日夜父母ノ安否ヲ念トシ。予ニ面スル毎ニ。談必ス此ニ及フ。蓋シ天性也。病ニ罹リ。房州ニ寒ヲ避クルヤ。病間安房水産誌ヲ著シ。又平磯ニ遊フヤ海藻圖說ヲ著ス。再ヒ予家ニ寓スルニ及テ。大日本農史修訂ノ助手

ヲナシ。廿四年病ヲ興シテ國ニ歸リ。五月廿五日遂ニ起キズ。其逝クニ臨ミ。弟妹ヲ訓ヘテ。孝道ヲ申ヘシムト云フ。嘗テ聞ク其幼童タルノ時。才氣衆兒ニ異ナリ。沈深ニシテ考慮ニ長シ。明治五年線引某ノ門ニ入リ。漢籍及習字ヲ受ク。六七年新庄學校ニ學フ。十一年下等小學科ヲ卒業シ。十三年上等小學科ヲ卒業ス。尋テ栗田寛ノ門ニ入リ。皇學ヲ修ム。又自強舍ニ入學ス。十四年茨城縣勸業課雇員トナル。課長高島千畝大ニ其才ヲ愛ス。同課河井貞一若林高孝等尤モ親善。十五年辭シテ東北三陸ヲ漫遊シ。大ニ三本木野開拓ノ規摸ニ感發ス。既ニシテ岩手縣下久慈學校教員トナル。十六年父病ヲ聞キ馳歸ル。再ヒ彰考館ニ入リ。殖貨志禮樂志等ノ校訂ニ從事ス。十七年茨城縣師範學校ニ於テ。應請試驗ヲ經テ。學科皆及第ス。

十八年東京ニ出テ。予家ニ寓シ。水産局員河原田盛美ノ推舉ニヨリ。大日本水産會ニ從事セリ。履歷ノ順序概ヲ斯ノ如シ其著述ノ筆。考證ノ才。實ニ少年中得難キ者トナス。其孝道ニ於ケルヤ最モ彝倫ノ摸範トナスニ足ル。嗚呼闕千ノ如キハ。其名ヲ後世ニ傳フヘキモノナリ

明治二十五年四月廿六日

織田定之識

明治廿五年四月廿八日印刷
明治廿五年五月五日出版

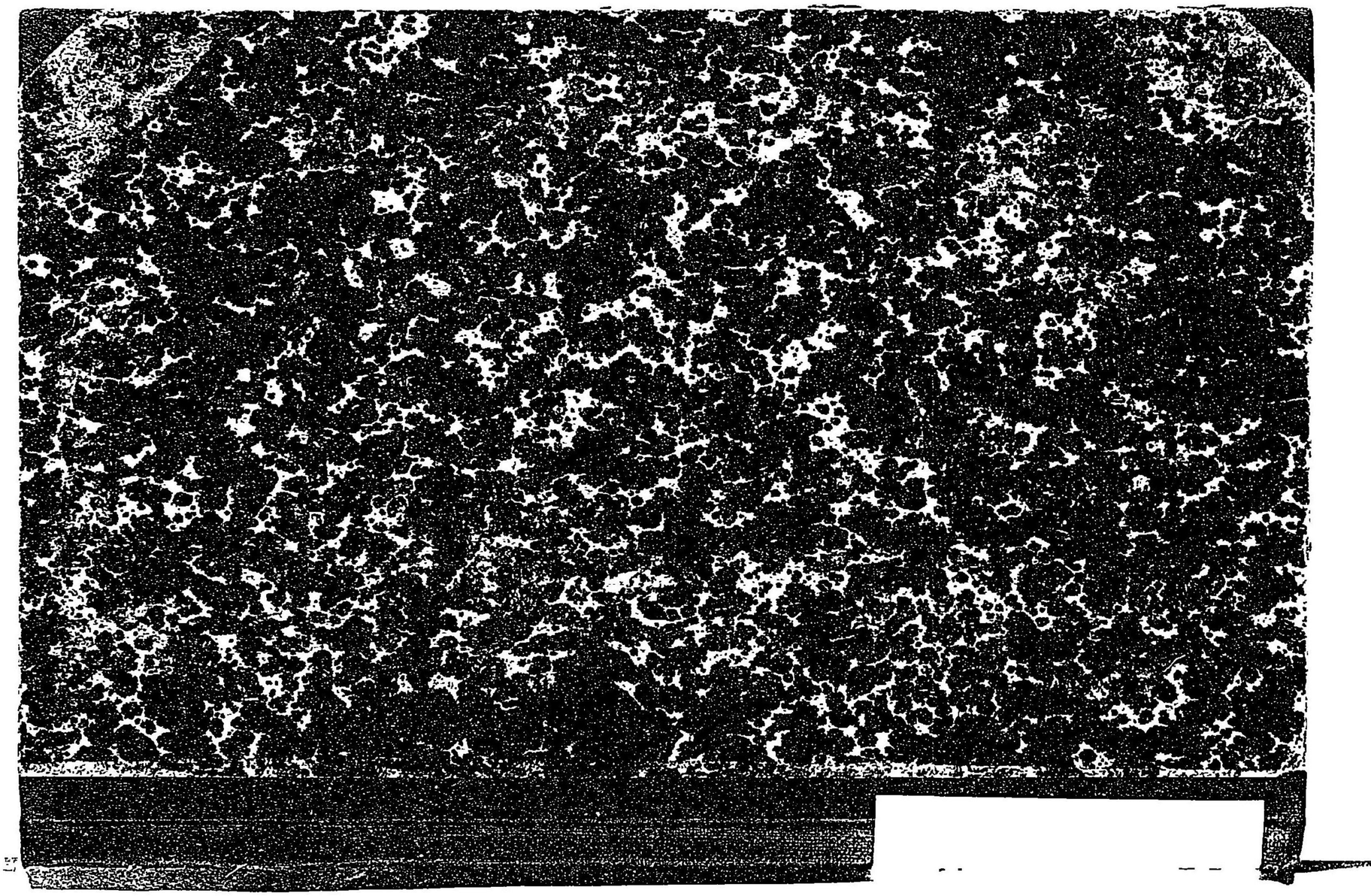
著述者　故人　關　千

著述者　茨城縣水戸市上市北横町五番地　關　正　德

相續人　東京市神田區猿樂町二丁目十一番地　織　田　完　之

發行者　東京市日本橋區兜町壹番地　製紙分社　金　田　新　太　郎

印刷者　東京市日本橋區兜町壹番地　製　紙　分　社

印刷所

法
30